

■研究発表論文

山水画の構成手法と池泉鑑賞式庭園の景観構成に関する研究

The Configuration Method of Landscape Painting and the Landscape Composition of Viewing Pond Gardens

真木 利江* 柴 惟史**

Rie MAKI Tadafumi SHIBA

Abstract : This paper is a part of the research intends to shed light on the model of ideal scenery in Muromachi period. The aim of this paper is to clarify whether the landscape painting affected the landscape composition of viewing pond gardens in the period. There are eight gardens still exist, and each garden consists of upper part with main stone arrangements and lower one with pond in common. The landscapes of gardens are analyzed by the arrangement of garden elements according to the line of view. In consequence, we have following two distinct types of landscape composition: 'diagonal type' and 'orthogonal type'. Five gardens of 'diagonal type' are characterized by the composition that stone arrangements lined along diagonal vector show the unification of garden elements. Three gardens of 'orthogonal type' show the vector toward the artificial hills in the center contrasts garden elements lined horizontal. Each spatial composition is illustrated with isometric projection, and considered by comparison to two configuration methods of landscape paintings: 'three perspective drawing' and 'one corner' composition.

Keywords: Muromachi period, Landscape painting, viewing pond garden, landscape, type, composition

キーワード : 室町期, 山水画, 池泉鑑賞式庭園, 景観, 類型, 構成

1. はじめに

本稿は、山水画の構成手法が室町期に作庭されたとされる池泉鑑賞式庭園の構成にみられるかどうか、その可能性を検討することを目的としている。

室町期における庭園の姿は、会所を中心とした連歌・水墨画・生花等の文芸的社交、その中心の一つを形成していた中世禅宗寺院の塔頭、書院造の発展等と重ね合わされ理解されている。山水は多様な文化的営みに通底する主題の一つであった。当時、庭園形式が池泉廻遊式から鑑賞式¹⁾へと移行するとともに枯山水が発展するが、庭園史の分野ではその際に山水画が作庭へ多大な影響を与えたと広く概説されている。とくに残山剩水²⁾の理念が縮景志向とともに紹介されることが多く、山水画の具象的表現としての大仙院庭園に対し抽象的表現としての竜安寺庭園という例示が定式となっている³⁾。しかし、その造形的な関係を具体的に問う研究は十分に蓄積されていない。

室町期庭園に関するまとまった研究としては、まず外山英策による文献研究⁴⁾そして重森三玲（以下、重森）らによる庭園の実測と観察にもとづいた研究⁵⁾があげられる。また、枯山水庭園については様々な観点から調査・分析・考察が試みられており⁶⁾、池泉廻遊式庭園に関しても、現存例が少ないものの発掘調査等により新たな知見が示され、その成果をふまえた研究も重ねられている⁷⁾。しかし池泉鑑賞式庭園については重森らによる研究以降、まとまった研究はほとんど行われていない⁸⁾。

本稿では山水画が作庭に影響を与えた可能性を、造形的な類似性という観点から検討する。そこでまず美術史分野で明らかにされている山水画の構成手法をとりあげ、庭園への敷衍可能性について検討を加える。次に室町期に作庭されたとされる池泉鑑賞式庭園を対象として、景観構成類型の抽出を試みる。最後に抽出した庭園の景観構成類型と山水画の構成手法を比較し考察を加え結とする。

2. 山水画の構成手法

本稿では美術史分野で広く知られている山水画の構成手法として、北宋画に由来する三遠と南宋画に由来する边角の景をとりあげる⁹⁾。

(1) 三遠

まず、高遠・深遠・平遠からなる三遠は、郭熙によって論ぜられた遠近法で、北宋を中心に発達したとされる。図-1 左に一幅の中に三遠が描かれた代表的作品である郭熙による『早春図』を示した。中央上部の山嶺が高遠、右下の山麓奥に滝が描かれた部分が深遠、左中段の水平に広がる地形の部分が平遠にあたる。三遠については構図法として捉えるもの、それぞれを仰角視・鳥瞰視・水平視という視点場と視対象の高さ関係に対応するものなど、複数の解釈が示されているが、最も素直な理解は山水画が描出すべき山水の空間を三つにまとめたとするものであり、上下・前後・左右という空間の3方向の広がり、山水の高さ・深さ・広さの表現に対応するとされている¹⁰⁾。この理解に立つとき三遠は、山水画に限らず風景の表象を志向するあらゆる造形作品に敷

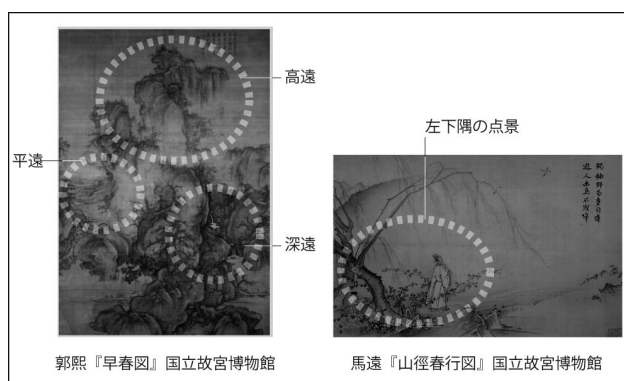


図-1 三遠と边角の景

*広島女学院大学人間生活学部 **フリー

衍することが出来、池泉鑑賞式庭園も含まれる。本稿では庭園の分析において眺めの中に捉えられる空間の3方向の拡がりに検討を加えることとする。

（2）辺角の景

辺角の景は主に南宋画院の馬遠や夏珪によって使われた画面形式として知られており、北宋の全景山水に対し南宋で発展する点景山水の構成を指す。図-1 右に馬遠による『山徑春行図』を示した。画面の左下隅に風景のごく一部が描かれ、それ以外が余白とされている。辺角の景はこのように、点景を画面の左下または右下隅に寄せて描き、中央や上方部分の多くを余白とする配置が特徴的で、この余白による視覚的余韻によって鑑賞者に詩情を喚起させる。画面の対角線両端の位置にそれぞれ点景を配し、中央を余白とする配置もこれに含まれる。作庭と山水画を結ぶときにしばしば用いられる残山剩水はもともと江南地方の「敗残亡国の山水」を意味するが、この画評語としての意味が辺角の景であり、辺角の景で隅に配置される点景が残山剩水として捉えられる¹¹⁾。

また、辺角の景は、絵画におけるより広義の構成手法である対角線構図に含まれる。対角線構図とは、画面の対角線またはそれに近似する斜線上に要素を配置することで動態を創出する構図である。対象も風景に限定されず、遠近・リズム・明暗・色相の対比や強弱と組み合わせられることで、より効果的な動態¹²⁾が創出される。辺角の景は対角線構図の特徴である斜線上の要素配置に加え、余白による視覚的余韻を特徴とする構成手法である。

本稿が主題とする造形的な観点から辺角の景を庭園に敷衍するとき、例えば庭園の眺めの中で隅に石組が配置され、その他は水面や白砂が広がる等が想定され、三遠と異なり具体的に個別的な造形手法といえる。

3. 池泉鑑賞式庭園の構成

（1）分析の対象

本稿では重森他著『日本庭園史大系』で室町期の池泉鑑賞式の庭として扱われる12庭園のうち、当時の地割と石組をおおむね残していると考えられ、かつ現地調査が可能な8庭園を対象とする。保国寺庭園（愛媛県西条市）、旧秀隣寺庭園（滋賀県高島市）、旧玄成院庭園（福井県勝山市）、小川氏庭園（島根県江津市）、唯念寺庭園（滋賀県犬上郡豊郷町）、旧亀石坊庭園（福岡県田川郡添田町）、万福寺庭園（島根県益田市）、医光寺庭園（島根県益田市）である¹³⁾。これら8庭園はいずれも書院等の建物から眺められることを主体とした池泉を持つ庭園である¹⁴⁾。池泉の奥には山畔利用や築山の造成により、建物からの視線が受け止められるような立体的構成を持っている。山畔や築山には主要な石組が施され、眺めにおける焦点の一つをなしており、池泉にはいずれも滝石組が組まれ、中島や出島により変化が与えられ石組が点在する。

各庭園の分析において、まず先行研究と現地調査にもとづく現在の庭園を照らし合わせ、必要な場合には現状の荒廃部に対し当時の庭園の想定を行う¹⁵⁾。次に先行研究で示される建物の推定位置を参照し、8庭園の書院方向からの眺めを対象として景観構成の分析を行い、構成の共通性・相違性に注目することで景観構成類型の抽出を試みる¹⁶⁾。なお、現在、各庭園ともに樹木・樹林・灌木等が眺めの中に現れるが、当時の庭園植栽の様子について史実が明らかなものではなく、基本的に石組本意の庭園として扱う¹⁷⁾。

（2）分析の方法

庭園は限定された三次元空間の中に構成要素が配されたもので、その構成要素は大きく池泉や地面の起伏といった地形と、石組や建物等の人為的要素の2つに区分することができる。庭園のひろがり書院等の建物方向から眺められるとき、眺める人の視線に

表-1 分析指標

構成要素	地形	水面 地面（築山・山畔） 出島等
	人為的要素	石組 建物（本堂、書院） 橋等
配置の様相	位置	奥行：近景 / 中景 / 遠景
		水平：左 / 中央 / 右
	様相	垂直：上 / 中段 / 下 連続 / 断続 / 独立
空間の方向性	奥行：奥行感 水平：広がり感 垂直：上昇・下降感	

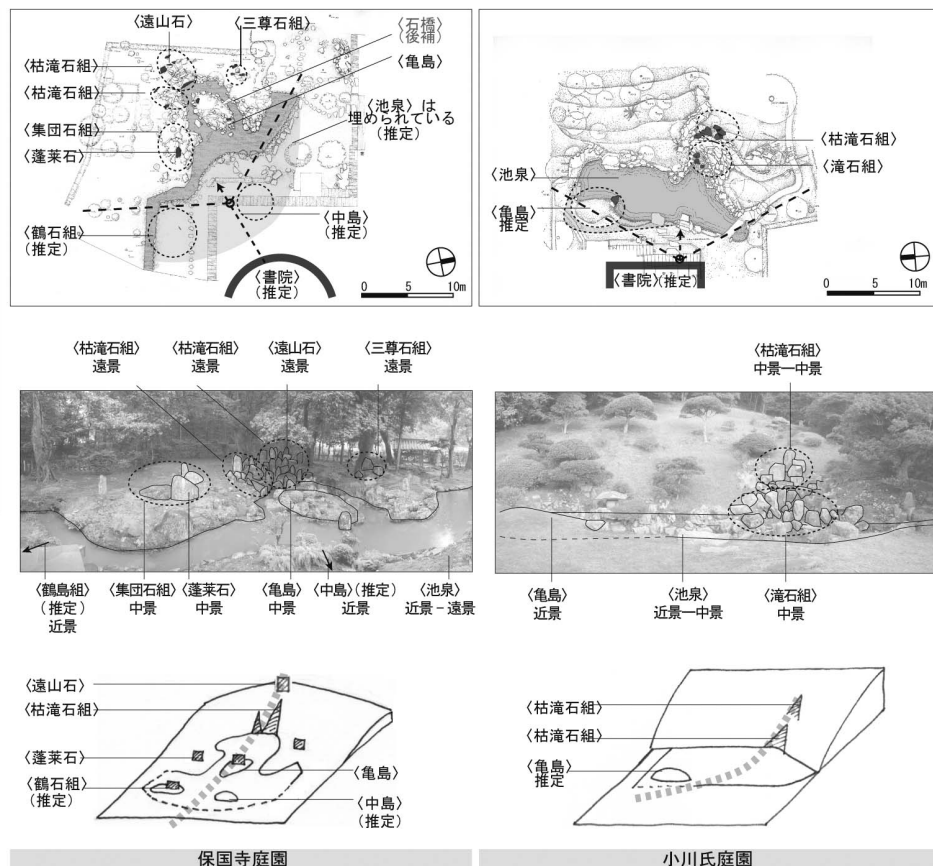
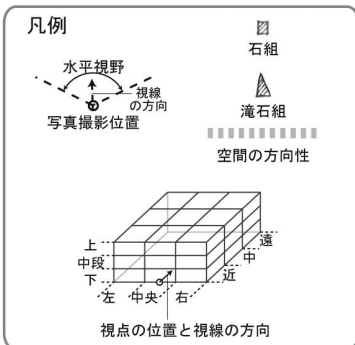
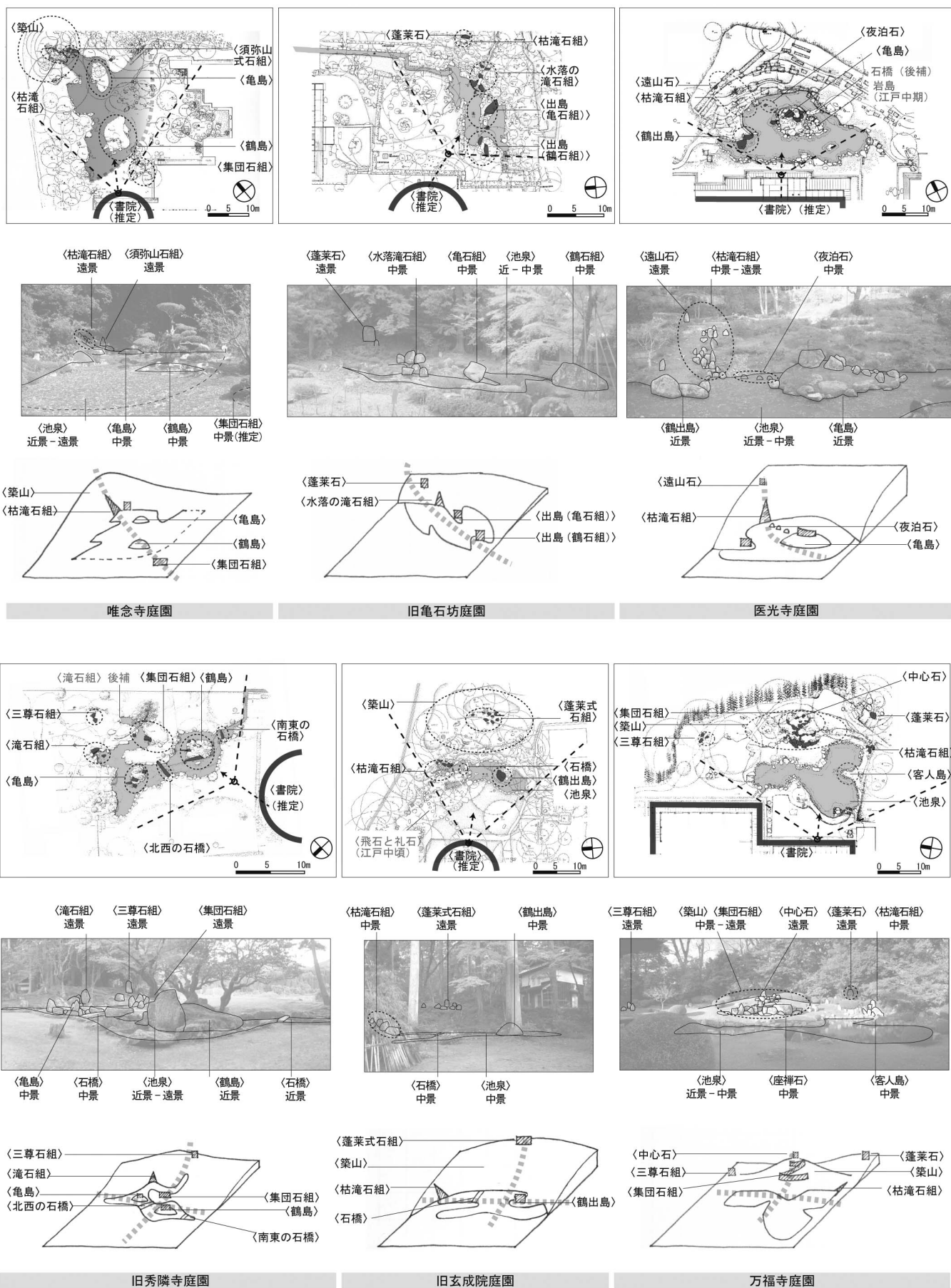


図-2 庭園の景観構成分析 1（平面図は『日本庭園史大系』より引用の上加筆、景観写真は筆者撮影の上加筆、模式図は筆者作成）



凡例は図2に同じ

図一 3 庭園の景観構成分析 2 (平面図は『日本庭園史大系』より引用の上加筆、景観写真は筆者撮影の上加筆、模式図は筆者作成)

対する位置関係が庭園要素に新たに付与されて眺めの中に現れることになる。眺めの中でこれらの構成要素は、水平方向の右-中央-左、垂直方向の上-中段-下、奥行き方向の近景-中景-遠景のなかに位置する。ここで奥行き方向は視線に対し、最奥部に位置する庭園の構成要素を基準とした相対的な距離とする。また庭園の構成要素は庭園空間の広がりの中で、たとえば池が左から右へ連続して広がる、複数の石組が手前から奥へ断続的に連なる、他の要素から離れ独立するなど、連続・断続・独立といった様相を伴って捉え直される。これら要素の配置によって眺めには広がり感、奥行感、上昇・下降感といった空間的動態が与えられる(表-1)。

先行研究と現地調査にもとづき当時の推定を行った庭園の平面図と景観、その分析を図-2.3に示す。景観は写真で代替した¹⁸⁾。また各庭園の配置の様相と空間の方向性をアイソメトリック図法により模式的に表現することを試みた。

(3) 景観構成類型

景観に現れる構成要素の配置の様相および空間の方向性の類似性に着目すると、これらを大きく2つに区分して捉える事が出来る。庭園全体の方向性が手前の低い位置における広がりから左右いずれか奥上方へと集約される<対角線奥行型>と、手前低い位置での左右方向の広がり、中央上部奥へ方向が直交する<中央上昇・水平型>である。図4にそれぞれの類型のアイソメトリック図法によるモデル化を試み、該当する庭園とともに示した¹⁹⁾。

対角線奥行型：保国寺庭園、小川氏庭園、唯念寺庭園、旧亀石坊庭園、医光寺庭園の5庭園が該当する。保国寺庭園をのぞく4庭園では、左右いずれかに偏った位置に滝石組が配置され、池泉はこれを頂点とする扇形または長方形に近似する形状で手前左右に広がっている。手前下方では池泉が左右方向に連続して広がり、これが滝石組へ向かって収斂していく斜め奥上方へ方向性がある

たらされている。いずれの庭園もこの方向性に沿って、池泉の広がりを斜めに横切るように鶴亀島・出島等が断続的に配されて同じくこの方向性を強調しつつ変化が与えられている。保国寺庭園は滝石組が中央に位置している点を除くとほぼ同じ構成を見せる。さらに医光寺、保国寺では滝石組の上部奥に蓬莱石が、旧亀石坊では遠山石が配され、奥上方へ方向性が強調されている²⁰⁾。

中央上昇・水平型：旧秀隣寺庭園、旧玄成院庭園、万福寺庭園では、滝石組は左右いずれかに偏った位置に比較的低く組まれ、池泉はやや変則的な形状を示しながら、左右方向の広がりを強調する。池際に点在する石組もこれを強調している。一方、眺めの中央上部奥、築山上部または山畔の傾斜上部に、旧秀隣寺では三尊石組、旧玄成院では蓬莱式石組、万福寺では中心石群が配されている。これらはそれぞれの庭園で最も遠くまた深い位置にある中心的な石組で、眺めの正面で立ち上がる地形とともに視線に沿って手前低い位置から中央奥上方へ方向性を強調しており、池泉による水平方向と対照をなしている。万福寺では二重に石組が重ねられ、旧秀隣寺では手前の鶴亀島から集団石組、三尊石組と、主要な石組がこの方向性に沿うよう配されている²¹⁾。

4. 考察

池泉鑑賞式庭園の2つの景観構成類型について、<三遠>および<辺角の景>と比較し考察を加える。

(1) 三遠と景観構成類型

三遠は上下・前後・左右という空間の3方向の広がり、山水の高さ・深さ・広さの表現に対応するもので、本稿ではこれを念頭に置いて庭園の眺めに与えられる空間の方向性に注目して分析を行った。

2つの景観構成類型を空間の広がり表現を整理すると、まず<対角線奥行型>では、池泉の形状や石組の配置により左右いずれかの下方手前から、左右逆側の上方奥への空間的動態が卓越する。この方向性は、庭園空間の三次元的な広がり対角線方向であり、この方向性に庭園要素の配置による空間の方向性が集約・統合されていると言える。これに対して、<中央上昇・水平型>は高さ・深さが一体になった中央奥上方への方向性と左右の広がり方向が重ね合わされ対比をなす構成として捉えられる。両者の高さ・深さ・広さ表現は大きく異なっている。

むしろ、これをもってすなわち当時の作庭者達が空間造形として2つの構成類型を意図的に用いていたということとはできないものの、山水画において古くから言語化され造形化されてきた<遠さ>が、構成類型のうちに異なった型として具体化されている可能性を指摘することが出来る²²⁾。

(2) 辺角の景と景観構成類型

山水画における辺角の景は点景を画面の左右いずれかの下隅に寄せて描き、広い余白が鑑賞者に視覚的余韻を与えるものであった。庭園では要素の配置されない水面や白砂が余白に当たると考えられるが、<対角線奥行型><中央上昇・水平型>のいずれも十分な余白を示しているとは言い難い。しかし類型を離れて8庭園を個別に検討するならば、小川氏庭園では左手前の鶴島と右奥の滝石組が中景の池泉を挟んで対置され、おおきく余白を挟んだ対角線両端の石組配置となっている。

一方、2つの構成類型と辺角の景が含まれる対角線構図を比較すると、<中央上昇・水平型>との間に造形上の類似を見いだすことは難しいが、<対角線奥行型>との間には強い相同性を指摘することができる。左右いずれかの手前隅から反対側の奥上方へ庭園要素が配置される様は、対角線上の要素配置が、遠近と組み合わせられた効果的な動態の創出といえる。これまで室町期の山水画と庭園の関係は残山剩水の理念と縮景志向が両者を結ぶものとして紹介されてきた。もちろん庭園に配されるそれぞれの石組を、

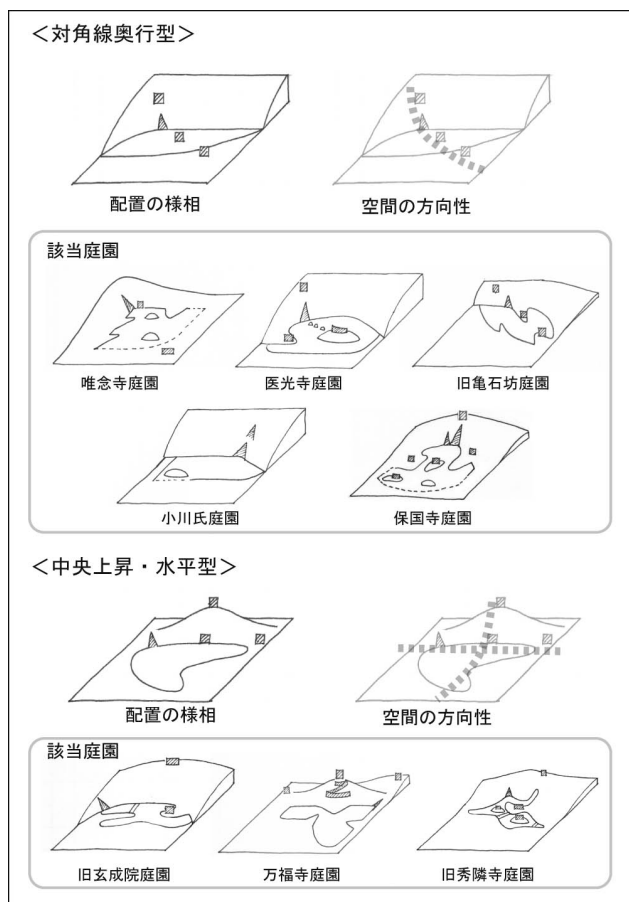


図-4 池泉鑑賞式庭園の景観類型

自然の断片表現つまり残山剩水と重ね合わせて論じることが可能である。しかし、山水画と池泉鑑賞式庭園の造形的関係を具体的に問うとき、＜対角線奥行型＞は辺角の景ではなく、より広義の対角線構図と強い照応を見せる絵画的な構成として理解することができる。

補注及び引用文献

- 1) 室町期庭園に限らず日本庭園の様式呼称は、時代・鑑賞形式・建築様式との対応・思想的背景など、区分の指標によりまた研究者により相違がある。最も広く共有されている様式区分の一つに吉川需によって示された林泉庭園、枯山水、露地という3区分がある(吉川需(1968):古庭園のみかた、第一法規出版)。ここで林泉庭園の下位に位置づけられている廻遊庭園または廻遊式庭園を江戸期の総合的庭園とし、室町期の大規模庭園をこれに含めないとする見解が示され、巡遊式という呼称が紹介された。近年では、吉川と同様に廻遊式(回遊式)をあくまで江戸期のものとする見解がある一方で(小野健吉(2004):日本庭園辞典:岩波書店)、この3区分を出発点としながら林泉庭園(池庭、池泉庭園)を鑑賞形式によって「池泉舟遊式」「池泉回遊式」「池泉鑑賞式」「流水鑑賞式(曲水式)」とするもの(西桂(2005):日本の庭園文化 歴史と意匠をたずねて:学芸出版社)、同様に「池心式」「舟遊式」「廻遊式」「鑑賞式」等とするもの(斎藤忠一(1978):名庭鑑賞辞典 池泉:探訪日本の庭 七、小学館、168-173)もみられる。本稿では後者の呼称に従った。
- 2) 森蘊(1993):日本史小百科 庭園:東京堂出版/小野健吉(2009):日本の庭園-空間と美の歴史:岩波書店他。
- 3) 外山英策(1973 復刻):室町時代庭園史:思文閣出版
- 4) 重森三玲(1936-39):日本庭園史図鑑:有光社
- 5) 重森三玲・重森完途(1971-76):日本庭園史大系:社会思想社
- 6) 大山平四郎(1970):竜安寺石庭 七つの謎を解く:講談社/宮元健次(2001):龍安寺石庭を推理する:集英社/宮江介他(2007):枯山水庭園の石庭における5・7・9石石組の配石原則に関する研究:ランドスケープ研究 70(5)、491-496 他。
- 7) 近年、各地で発掘調査が進んでいる。例えば慈照寺庭園、常栄寺庭園では部分的な発掘調査及び報告が行われている。京都市埋蔵文化財研究所編(2003):京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-01 史跡 慈照寺(銀閣寺)旧境内:京都市埋蔵文化財研究所/山口市教育委員会文化課編(1997):山口市埋蔵文化財調査報告第66 集常栄寺:香山常栄寺,山口市教育委員会。これら発掘調査の知見に基づく研究として飛田紀夫(2006):庭園の中世史 足利義政と東山山荘:吉川弘文館/拙稿(2011):常栄寺庭園にみる室町期の景観構成の特徴に関する研究:ランドスケープ研究 74(5)、375-378。慈照寺庭園は、当時と現況が大幅に異なる可能性が指摘されている。
- 8) 池泉鑑賞式庭園に関する具体的な先行研究については後述。
- 9) 山水画の構成手法については主に次の文献を参照した。王福庭(1995):中国絵画のみかた:二玄社/新藤義弘(1989):山水画とは何か 中国の自然と芸術:福武書店/平凡社編(1984-1991):平凡社 大百科事典:平凡社/石田尚豊他監(1987):日本美術史事典:平凡社/秋山光和他編(1985):新朝世界美術辞典:新朝社
- 10) 三遠は郭熙(1020頃-90頃)の子である郭思によって編まれた『林泉高致』(北宋11世紀頃)で論じられたもの。三遠の理解については、次を参照した。島尾新(2010):水墨画の歴史を語る 郭熙の「三遠法」と《早春図》:趣味の水墨画,ユーキャン 2010年5月号、34-39/黒田正巳(1992):空間を描く遠近法,朝国社/佐藤康邦(1992):絵画空間の哲学:思想史の中の遠近法,三元社。島尾は『林泉高致』の「山に三遠あり。山下よりして山顚を仰ぐ、これを高遠という。山前よりして山後を窺う、これを深遠という。近山よりして遠山を望む、これを平遠という」という箇所のみがしばしば引用されることが問題で、前後を総合すると「山水画がきちんと描出すべき空間を三つにまとめた」という理解になるとしている。また「三遠」を「三遠法」と法則として理解する呼称にも疑問が示されている。当時、三遠が日本の山水画でどのように理解され実践されていたかは明らかになっていない。また、三遠の遠さは単なる空間的な問題ではなく精神の深さの反映として理解すべきとする見解もある。源豊宗(2006):日本美術の流れ:新思泉社
- 11) このことから残山剩水の理念と縮景志向が庭園と山水画を結ぶものとして紹介されるものと思われる。残山剩水の理念をあらゆる断片的表現に対応させて理解することは可能であるが、本稿では辺角の景の造形的な型としての側面を扱う。
- 12) 対角線構図は絵画表現そのものが動態(運動,ムーブメント)の印象を喚起する形式の一つで、曲線や不均斉な配列など不安定な感じを引き起こす構成の一つである。絵画における対角線構図が示す動態は必ずしも空間的ではない。竹内敏雄編(1961):美学事典:弘文堂、244-245

- 13) 重森、前掲5で室町期の庭園を扱った5,6,7巻による。庭園名称もこれに倣った。重森、前掲4ではこのうち6庭園が弼収されており、必要に応じて参照した。本稿で扱わない4庭園は旧西方院庭園(広島県廿日市市)、旧鈴木三郎居館庭園(和歌山県海南市)、旧大寺(伊藤氏)庭園(兵庫県南あわじ市)、北畠神社庭園(三重県津市)である。旧西方院庭園は現在非公開である。旧鈴木三郎居館庭園は細川高国による曲水式庭園である可能性が指摘され、文化財的価値が高い庭園の一つとされるが、重森調査時にすでに池泉が枯れ、石組のほとんどが失われる等の荒廃が進んでいる。旧大寺庭園も、重森の調査時にすでに相当の荒廃が進んでいると報告されているが、阪神淡路大震災後も手入れされることなく放置された状態で、さらに荒廃が進んでいるものと推定される。
- 北畠神社庭園は管理の行き届いた美しい室町期庭園の一つである。重森は蓬萊曲水池泉鑑賞式としているが(前掲5)、庭園は三千平米ちかくにひろがり池泉廻遊式とする見解もある(大橋治三、斎藤忠一編(1998):日本庭園鑑賞辞典:東京堂出版)。重森の調査以降、部分的であるものの発掘調査も行われている。三重県美杉村教育委員会編(2002):北畠氏館跡6名勝及び史跡北畠氏館跡庭園 記念物保存修理報告、美杉村教育委員会。そこで2010年7月と12月に現地調査と文化財担当者等へのヒアリングを行い池泉鑑賞式庭園に含めないこととした。
- 重森の研究は、現在の庭園史分野における編年の基礎になっているものの、その後の発掘調査や文献史学の進展により、疑義が示されている庭園もある。対象庭園に関する重森以降の調査研究は次の通りで、文献の解釈や作庭手法に関して重森と異なった見解を示すものもあるが、庭園構成に関わる新しい史実や決定的論考は示されていない。また医光寺庭園でも発掘調査・修復工事が行われており2012年度に報告書が作成される予定である。対象とする8庭園のいずれも、室町期の作庭を直接に裏付ける史料は現存せず、また程度の差があるもののいずれも荒廃が進んでおり、当時の庭園と現状との間に相違が指摘されている。
- 旧秀隣寺庭園:**実測調査図が次に所収され、部分的に重森と異なった見解が示されている。朽木村史編さん委員会編(2010):朽木村史 資料編 朽木の文化財5 池の沢庭園と旧秀隣寺庭園:滋賀県高島市。また庭園を含め周辺地域の発掘調査等が進められているが、庭園部の発掘は行われていない。滋賀県教育委員会編(1991):滋賀県中世城郭分布調査8 高島郡の城:滋賀県教育委員会/高島市教育委員会編(2009):高島市内遺跡調査報告書:滋賀県高島市、高島市教育委員会
- 旧玄成院庭園:**実測調査図が次に収められている。福井県編(1989):福井県史 資料編14 建築・絵画・彫刻等:福井県。また白山神社平泉洗宮司による研究が次にまとめられている。平泉百合子他編(1998):平泉洗 遺稿集
- 小川氏庭園:**江戸初期の書院の移築に伴い、試掘が行われている。江津市教育委員会(2006):小川庭園書院跡試掘調査報告書:江津市
- 旧亀石坊庭園:**英彦山地区の保存施策の資料収集を目的とした調査が行われており、実測図も収められている。福岡県文化課・添田町社会教育課編(1978):山伏の住む英彦山-英彦山伝説的建造物群保存地区調査概要:添田町教育委員会
- 14) 重森の研究は用語使用や論理構成に混乱が見られることが知られているが、対象とする8庭園の様式名称については一貫性がない。万福寺庭園と医光寺庭園は廻遊兼鑑賞式または鑑賞兼廻遊式とされるが、具体的な廻遊路の指摘は全く行われていない。一方、場合保国寺庭園・旧秀隣寺庭園・旧玄成院庭園については曲水式と指摘されている。旧玄成院庭園に関しては、他の研究(福井県編、前掲9)で回遊式枯山水庭園として紹介されており、2通りの巡路が示されている。これらの庭園について、われわれは当時の鑑賞者が鑑賞庭園内に降り立ち、廻遊を伴ってまた曲水の宴の用途に供し鑑賞した可能性を否定しないが、基本的には書院(建物)からの鑑賞が共通する大きな主題になっていたという仮定に立つ。
- 15) 平面図中に現存する当時の石組と考えられているものを濃いグレーで示したが、護岸石組については現存石組が部分的であることが多いため、池泉形状を示すことで代用し表示を省いた。

各庭園について、先行研究で指摘される現状と異なる当時の可能性のうち景観分析に関連する内容と、それに対する想定をまとめておく。基本的に重森の想定にもとづいたが、判断が難しいものは現状を優先した。

保国寺庭園:重森、前掲5、第5巻、31-40/前掲4、第4巻、24-30、および2010年10月の現地調査による。亀島へ架かる石橋は手法から後補のものと考えられている。作庭当時は現在より書院が東に位置し、より広い池泉が広がり、中島・鶴島が浮かんでいたと考えられている。これらの正確な位置は不明であるが、本稿ではこれらの見解をこない、おおよその位置を仮定した。

旧秀隣寺庭園:重森、前掲5、第5巻、87-96/前掲4、第3巻上、64-70および前掲9の資料、2010年11月の現地調査・ヒアリングにもとづく。まず、現地では庭園が北東側へ約2倍の広がりを持っていたとする見解もあるが現状に従った。庭園

を鑑賞する書院位置は庭園の南西部とするもの（重森、前掲5、90）、庭園西部とするもの（朽木村史編さん委員会、前掲9、94）で見解が分かれるが、現地では非公式な発掘調査により土器が発見された経緯からも南西部が支持されており、本稿でもこれにならった。現存石組については重森の見解にならった。

旧玄成院庭園：重森、前掲5、第6巻、119-126、および前掲9の資料、2010年11月の現地調査・ヒアリングにもとづく。重森の指摘と県史（福井県、前掲9）での指摘に乖離の大きい庭園であるが、書院位置は共通して東側の建物跡付近と考えられている。池は重森の指摘に従い、水が張られていたと想定している。その他石組に関する考え方も重森の見解に従ったが、県史では鶴出島が岩島であった可能性等も指摘されている。

小川氏庭園：重森、前掲5、第7巻、3-10／前掲4、第3巻上、70-75、および前掲9の資料、2010年11月の現地調査・ヒアリングにもとづく。重森は、当時池泉がより西側に広がって州浜をなし、亀頭石のある池泉北西の出島が亀島だったと指摘している。2006年の試掘時、重森の見解を念頭に置いた調査が行われたが、否定する結果は得られていない。現在の書院建物は重森調査時より西へ約3m位置が動かされている。本稿では書院位置は現在と同等の位置、池泉は西にやや広がって亀島を浮かべていたと想定した。池泉がさらに広がった可能性もある。

唯念寺庭園：重森、前掲5、第7巻、11-18／前掲4、第4巻、30-33、および2010年11月の現地調査・ヒアリングにもとづく。本稿で取り上げる8庭園の中で最も荒廃が進んでいる庭園であり、重森以外のまとまった調査研究は存在しない。重森はこれを池泉庭園と位置づけているが、現地では古来、水利に恵まれない土地であることから疑問視する意見も聞かれた。重森は意匠的特徴から室町初期の作と位置づけて当時の庭園の姿を想定しており、本稿ではこれらに倣う。

旧亀石坊庭園：重森、前掲5、第7巻、37-42、および前掲9の資料、2010年11月の現地調査にもとづく。書院位置についての見解が分かれている。重森は明記しないものの、庭園西側から眺めた形で庭園を記述している。これに対し、後者は現在建物が建っている北側に坊舎があったとするが、根拠は示されない。本稿では重森が庭園を眺める位置に書院を想定した。

万福寺庭園：重森、前掲5、第7巻、43-50／前掲4、第三巻下、41-49、および2010年4月12月の現地調査にもとづいた。北部の三尊石組周辺により多くの集団石組があった可能性が指摘されているものの、ほぼ当時の様子を伝えていと考えられている。

医光寺庭園：重森、前掲5、51-58／前掲4、第三巻下、46-52、および2010年4月、12月の現地調査にもとづいた。次の文献では火災後、建物が庭園側に拡張されたと指摘されており、書院位置が現在よりやや南に位置していたと想定した。白石直典(2000)：雪舟の庭：西日本出版社、166-168／矢富巖夫(1980)：雪舟：雪舟顕彰会、65。石組等については亀島に架かる橋、岩島は後補、夜泊石は当時からとする重森の見解にならった。

- 16) 本稿では先行研究等で推定されている書院位置方向から庭園の全貌が眺められるよう、現状で可能な範囲で写真撮影し、これを対象として景観分析を行う。書院建物は、当時と現状の相違が大きくないと考えられている小川氏庭園、万福寺庭園、医光寺庭園の3庭園は方形で示したが、当時の位置のみが推定されている残り5庭園は、庭園に対する建物の向きおよび規模が不明であるため、室町期方丈建築の横幅に当たる7.5間を目安として位置の表示とした。
- 17) 次のように植栽も重要な役割を果たしていたという指摘もある。小野健吉(2005)：フロイス『日本史』の記述から読み解く永禄8年(1565)の京都の庭園の形態と機能：ランドスケープ研究68(5)、369-72
- 18) 写真は水平画角約65度のカメラで撮影したが、撮影可能な地点から庭園の全貌を示すことが出来るよう、8庭園のうち旧玄成院庭園と唯念寺庭園を80度、他の6庭園は120度の水平視野になるよう画像をつなぎで使用する。平面図上に撮影地点と水平視野を示した。また視線の方向である水平視野の中央線を矢印で示し、書院位置が当時と異なっていると推定され、撮影地点と視点場である書院建物の位置が揃っている庭園（保国寺庭園、旧秀隣寺庭園、旧亀石坊庭園）は、この矢印を書院側に延長し位置関係を示した。水平・垂直方向の位置および連続・断続の様相は明示されるため、奥行方向のみ記した。また空間の方向性は図中の表示を省いた。
- 19) 該当する庭園はモデルに近い庭園から上段右から左、下段右から左の順に並べた。
- 20) この方向性は景観構成分析及び模式化で基準とした直方体の対角線にあたる。
- 21) ここで2類型と、重森が示す作庭時期および庭園様式との関係を記しておく。保国寺庭園、小川氏庭園、唯念寺庭園の3庭園が室町初期に、万福寺庭園、医光寺庭園、旧亀石坊庭園の3庭園が室町中期に、旧秀隣寺庭園、旧玄成院庭園の2庭園が室町末期に位置づけられている。＜対角線奥行型＞に該当する5庭園は初期3、中期2庭園であり、＜中央上昇・水平型＞の3庭園は中期1、末期2庭園である。時代を

下るにつれて景観構成が変化していった可能性も考えられる。また、廻遊式を兼ねる庭園が2、曲水式が3庭園挙げられていたが（前掲、9）、＜中央上昇・水平型＞の3庭園はすべてこれらに該当する。これは一方向からの眺めだけでなく、別の地点からの眺めが想定されていた可能性も考えられる。

- 22) 両類型の滝石組位置の相違が型としての意識の相違を表しているようにも思われる。山水画においても、滝は観瀑図という画題が成立するほどしばしば描かれたモチーフであるが、8庭園ではすべてで滝石組が組まれている。庭園に配される石組は蓬萊、鶴亀と言った意味と結びついて当時の鑑賞者に捉えられていたが、それぞれがそれらの意味を正確に理解することは難しい。しかし、滝石組と池泉という構成要素の関係は、龍門瀑といった個別の意味をこえて、水が高いところから低いところへ流れ込むという普遍的な関係が成形化されたものである。この滝石組と池泉の結びつきが＜対角線奥行型＞では、上部主要石組から池泉への一体的な関係に内包されるのに対し、＜中央上昇・水平型＞では、滝石組と池泉の連続的な関係と離れた位置に上部主要石組が組まれ、これが直交する方向性の創出に寄与している。